自然農の未来を明るいものに。農業法人としての使命。

**農の仕組みを立て直し、誰もが安心して食べられる食材を。
その大きな命題を実現するべく、
<日本豊受自然農> は農業法人として立ち上がった。**

文・甲藤麻美　　写真・依田恭司郎

ホメオパシーから農へ。

静岡県田方郡函南町。箱根連山の中腹、標高300メートルの場所に、富士山を見渡す広々とした畑が広がっている。農業生産法人〈日本豊受(とようけ)自然農株式会社〉の畑だ。ニンジンを収穫する15名近くの方々のなかに、日本におけるホメオパシーの第一人者、由井寅子さんがいた。ホメオパシーとは、病状と同種の症状を引き起こすものを希釈して与えることで自己治癒を促すという、ヨーロッパやインドで盛んな療法だ。

「ホメオパシーの患者さんでアトピーがなかなかよくならないお子さんがいたんです。試しにオーガニックの食生活を実践してもらうと、症状がみるみるうちに改善していきました。さらに、自然農の食事を徹底した患者さんはもっと治りが早かった。そこで農家を訪ねて自然農の米や野菜の生産量を増やせないかと頼んだのですが、かえって農家の厳しい現実を知ることとなり、愕然としました。それで自分が自然農をやろうと思ったんです」

愛媛県の農家に生まれた由井さんには、幼い頃に家業を手伝った記憶がはっきりと残っていた。この記憶を頼りに、どこで学ぶでもなく農の世界に足を踏み入れていく。

「9年前、熱海にある私の家の近くに1反7畝